

震災編

文明と誇り、文化と呼んだ、夫れも唯一時の悲壯な映景にすぎないのでは無かつたか。人の力はつひに自然の力に抗すべくもない。人はこう云つて、一度はかの方丈記に現はれた、長明の思想を肯定したであらう。而して再び思ひを廻らす事に依て、徒に昨の幻影を追ふをやめ、決然として復興の鋤を握つたに違ひない。戦慄すべき呪はれの日を過ぎて、僅に旬日、滿地に脈々たる復活の氣の動くのに氣付いて、頼母しくも意を強ふした。今や人々は、小さくはあるが、自然に對する反抗を、再び試みるまでに至つた。而して、現在に於ては、總てが過去の一夢として、我等の記憶から、うすらぎ行つてゐる。

今、是の非常な時に當つて、中井村の受けた傷跡を録して、多くの現代人が、恐らくは生涯再び出遭はないだらう——そういふ事を希つてゐる——大災の日の後日の語り草の助けにもしたいと思ふ。

事の順序として、中井村全般に亘る、被害の概念を得る爲め、各部落別に、全體的に之れを叙して漸次、部分的に筆を進め度いと思ふ。

一、中井村各字の被害概説

イ、比奈窪 比奈窪は、村内でも比較的恵まれた部落であつて、一人の震死者も、重傷者をも出さなかつた。然し住家の全潰戸数は十五戸、半潰戸数十一戸を出して、部落を舉げて恩賜金に預つた事は、痛感の至りであつた。是等の全、半潰を更に詳細に亘つて、調査した結果は、住家の全潰十五同半潰十一は前述の通りであるが、此の外倉庫の全潰一、半潰二、非住家の全潰十、半潰十六を算し震災直後に於ける、小學校、駐在所等の調査には、損害見積り五千百三圓と計上されてある。

比奈窪全般に亘る田、畑、山林、宅地其他一切を計上すると、合計六十五町三反六畝廿八歩であつて、其の明細を列記すれば、次の様になつてゐる（中井村役場の土地臺帳に因る）

地目	反別	地價
田	八八九・二六	五、二四〇・四五八
畑	一七九八・〇五	二、五九三・九〇七
宅地	一三三・一五	三四一・四二五
山林	三五三八・〇八	一七七・八八七

藪、切替地
芝地沼地其他

二二三・〇六

二五・二三〇

是れに對して、地震の爲め、崩潰、埋没、龜裂したものは、畑が三段六畝十七步、田が一反九畝五步、山林が五町四反三畝十七步に上り、計五町九段九畝九步といふものは、五年十年の後でなければ、回復し得ないものとなつた。

口、松本

松本に於ては、下に被害軽く、上に重かつた。是れは一に地盤と地勢上との關係から來たもので、中にも一番氣の毒に堪へないのは中の窪の、俗稱を『カサ』といふ赤坂氏宅であつて、裏崖の崩潰と共に、一家三名震死せられたるは、悲痛の極である。

松本に於ける震死者は、前述の赤坂氏宅の三名、即ち赤坂諦司、赤坂ウラ、赤坂治子を始め、加藤キク、武田ムラ、山口ブン、小林ヨネの七名を出し、全村の死亡者の三割九分強、犠牲者を出した點に於て第一であつた。其の反面、恩賜金を頂く程の重傷者は一人も出さなかつた。

次に、家屋の倒潰したものは、全潰十三、半潰三十の住家を筆頭に、倉庫の半潰十六、非住家の全潰四十一、半潰四十、此の損害見積額一萬九千七百五十五圓に上り、境、井ノ口に次ぐ大被害を蒙つた。

更に土地に就て見ると、字の大きな割合に被害の率は少い。

地目	反別	地價	被害反別
田	一三〇九・一五	七、三四二・七七九	一三四・〇六
畑	七二〇六・〇一	一〇、六五・五九二	三二・二〇
宅地	四七八・一九	一、二三一・〇二一	—
山林	一一三五・〇五	五六〇・六八六	八・二三
原野	三六八九・一五	二三・〇四二	不 明
神地	一五・一二	—	—
官有山林	一七・二三	—	—
雑地	四八・〇〇	—	—
合計	二四〇八二・二五	一九、二二三・二二〇	一七五・〇九

ハ、雑色 雑色も比奈窪と共に、比較的に恵まれた地で、死傷者は一人も是れを生じなかつた。唯だ家屋は全潰二、半潰九を出し、倉庫の半潰二、非住家の全潰四、半潰十七で、損害見積千二百九十九圓。本村中で被害の一番軽かつた部落であつた。

又、是れを土地の方面から見ても、前と同じ事が謂ひ得るのも、よくよく運の好い村だつたと謂はざるを得ない。

地目	反別	地價	被害反別
田	七九四・二二	四、八六二・六八一	ナシ

畑	一六一七・一七	二、〇八〇・六四二	三三・一五
宅地	二三六・〇一	五七八・二八七	ナシ
切替地	四三・一四	六・四六七	ナシ
山林	三六五一・〇四	一八七・七五九	四〇〇・二六
藪	四〇・一九	三・三〇二	不詳
芝地	二三・二九	五九〇	同
計	六四〇七・一六	七、七一六・七二三	四三四・一一

ニ、鴨澤 地勢上の関係から、山林、田、畑の被害は可成甚しいものがある。不幸震死されたのは野地ハッ一人に重傷者一人であつたが、住宅の全潰は八戸、半潰は二十五戸を出し、倉庫の全潰二半潰一、非住家の全潰十三、半潰二十六で損害見積額四千三百五十六圓で、此の内、被害の最も甚だしかつたのは、高地にある山崎藤七氏宅で、地震と共に斷崖數十丈の下方に母家を崩落された。土地の被害は、山林が一番多く、全村中の大關である。

地目	反別	地價	被害反別
田	四五二・〇四	二、一三六・五四八	七一・二二
畑	二八二九・〇〇	四、〇四七・二三四	一〇五・一一
切替地	六〇〇・二五	八九・四〇二	不詳
宅地	二七九・二六	六八五・六七三	六・〇〇
山林	九一四五・〇七	三七九・二〇六	一九八二・一一

藪	一・〇三	八三〇	不詳
芝地	一五一・二一	二・二七四	不詳
計	一三四五九・二六	七、三四〇・三二〇	二一六五・一四

ホ、古怒田 古怒田に於ける被害は、重傷一人、住宅の全潰一、半潰二十、倉庫の全潰二、半潰五、非住家の全潰九、半潰三十八、是の見積損害高五千二百四十圓を算した。

一方、被害地積を見ると、山林の被害が、一町九畝十二歩を算し、畑、藪宅地の順位になつて居る。

地目	反別	地價	被害反別
畑	三二七八・一七	四、一七四・四六	一五・二一
切替地	二二三・〇八	四三・一八二	不詳
宅地	二一〇・一四	四六三・〇二五	六・二五
山林	三〇四八・二八	一五五・四六八	一〇九・一二
藪	四九・二二	三・七三二	七・二三
芝地	一・〇八	〇・一九	不詳
秣山	一八〇・二四	一〇・八〇五	不詳
計	八五一三・〇一	四、八五〇・六九二	一三二・二一

イ、半分形 此の部落に於ける損害は、家屋の全潰、半潰と田、山林等の被害丈けであつた。即ち住家の全潰は三、半潰は十一戸、倉庫の半潰二、非住家の全潰九、半潰十七で、其の損害三千

五百三十圓を見たのであつた。

翻つて、土地の被害を観察すると、山林の被害一町九反八畝十六歩を最として、外に田の被害一畝二十九歩を見た丈のであつた。之れを總體の面積に比較して見れば、次の通りになる。

地目	反別	地價	被害反別
田	四九五・二七	二、八四四・〇〇三	一・二二九
畑	四一九〇・二〇	六、三六四・三三七	ナ
宅地	二四三・〇二	六〇七・二四五	ナ
山林	三五一〇・〇八	一九五・二二九	一九八・一六
原野	六五・二四	一・八一七	不詳
計	八五〇五・二一	一〇、〇一二・七三二	二〇〇・一五

ト、田中 田中では、震災の爲め曾我領太郎、諸星ノブの二名を失ひ、重傷者六名を出した。夫れだけ被害の程度も大きく、住宅の全潰したもの十、半潰十九戸を出し、倉庫の半潰七、非住家の全潰二十一、半潰二十五戸を出した。是の見積損害高は八千四百二十圓で、損害の方からは前頭の筆頭か小結位の地位である。

又、眼を土地の方面に轉すれば、畑、山林の損害に相當の數字を現はした。

地目	反別	地價	被害反別
田	五二〇・〇五	三、〇五一・〇八〇	一五・一五

畑	三〇七四・二一	四、一七五・九〇七	一、二三・一二
切替地	二三一・二〇	二七・〇八七	不詳
宅地	三一八・〇一	八一六・〇五八	ナシ
山林	六六五七・一六	三七四・九六〇	八八一・〇七
藪	二・二一	〇・四〇五	ナシ
芝地	一四・〇一	〇・二五四	不詳
秣山	一四六・一七	〇・八七九	不詳
池沼其他	一九・〇八	〇・〇〇三	不詳
其他	一・〇五		
計	一〇九八五・二五	八、四四六・六三三	一〇一〇・〇四

全面積に對する約一割が大害を蒙つた譯であつた。

千、遠藤 遠藤に於ける被害は、家屋と土地に限られてゐる。

住宅に就て見るに、全潰十二、半潰二十三戸、倉庫の全半潰各々一、非住家の全潰二十一、半潰十

五、此の損害七千百五十圓は、尠からの損害といはねばならない。

更に土地の被害を見やう。

地目	反別	地價	被害反別
田	六三四・〇〇	三、八四五・二六〇	ナシ

畑	二五二七・一七	三、八四七・九七三	六六・一三
切替畑	六五・〇九	一二・六三〇	不詳
宅地	二八二・一四	七六六・八四三	ナシ
山林	三〇四五・一四	一七八・六四七	六三・二七
藪	四九・一〇	六・三一八	不詳
芝地	一四・一四	〇・三五二	不詳
計	六六一八・一八	八、六五八・〇二三	一三〇・一〇

り、北田 北田は不幸にも、土地其の物よりも、人命を損し、家屋の被害を受けた事に於ては、
 關協の地位に入る可き有様であつた。

一寸木フミ、一寸木タケ、一寸木マン、城竹キヌと女子計りを失つたのは不思議な次第で、此の外
 に二名の重傷者を出した。

家屋の被害状態は、全潰は、住家十五、非住宅八、半潰は住宅十七、倉庫三、非住家二十を算し、
 此の被害見積り六千五百六十三圓と推算されてゐる。

ところが、是の割合に土地の被害は、珍らしい程僅少であつた。勿論土地に關する、一切の數字は
 減免租の申請に基て作成したものである關係から、其の申告のないものは、調査困難の爲め、之れを
 省略するの止むを得ざる次第であるが、此點は、諸君の御了解を得ると同時に、實地の被害は、此等

の數字の二割増位に上つてゐる事を、御理解下さらん事を願つて置きます。

筆がつひ他に走つたが、改めて土地の状態を見やう。

地目	反別	地價	被害反別
田	七一・〇五	四、二一九・二〇五	ナ
畑	一七六・〇二五	二、八三八・〇五八	八・〇〇
切替畑	八二・一五	一五・九五四	不詳
宅地	二六九・〇二	七二六・四八〇	ナ
山林	三〇六七・一六	一八六・八一三	二〇・二〇
藪	三三・〇七	五・三八九	ナ
芝地	一六・一四	〇・一四三	不詳
計	五九四〇・二四	七、九九二・三二二	二八・二〇

依之觀是、五十九町四反二十四歩に對して、被害高は僅々二反八畝二十歩に過ぎない事は、北田の人々にとつては、不幸中の幸といふ可きである。

又、久所 久所は雜色と共に、被害僅少の大關である。重傷者一人に、住宅の倒潰四戸を出し、倉庫の半潰四、非住家の全潰七、半潰十を出したに過ぎなかつた。從て其の損害も二千四十圓に止つてゐる事は、幸福といはねばならない。土地に就ても、減免租の申告が皆無であつた丈、被害も一局部に留つてゐるものと推定される。

ル、藤澤 藤澤に於ける被害を一瞥すると、重傷者一名を出し、家屋の全潰一、半潰十、倉庫の半潰二、非住宅の全潰十三、半潰二十一で損害高は二千五百五十五圓、漸く幕の内に入った計りであつた。

然し、土地の損害は相當にあつた。殊に畑が比較的が大きかつた。

地目	反別	地價	被害反別
田	七三五・二二	四、〇九七・九七三	一四・〇四
畑	二九八三・一五	四、四八九・六六二	一二〇・一八
宅地	二六六・〇四	六六五・六二四	ナ
沼池	五・二三	〇・〇五八	ナ
山林	三八四五・一九	二二四・五九二	四三・一六
原野	四〇・一八	一・〇一六	不詳
計	七八七七・〇〇	九、四七九・〇二五	八八・〇八

オ、岩倉 岩倉は小村の割合に被害は大きかつた。大川文吉氏は、不幸震災の犠牲者となられた。重傷者は別に出さなかつたが、家屋は、全潰四、半潰九戸を出し、倉庫の全潰二、半潰五、非住宅の全潰八、半潰三十を見た。而して推定損害六千九百九十五圓、是れを戸數に比較すると、大變な損害である。

他面土地の被害も至つて多く、次の様な數字を示した。

地目	反別	地價	被害反別
田	三六九・二一	一、七一四・五九八	二八・二八
畑	二六七〇・一八	三、九一九・八八三	一六〇・一七
山林	四九四四・〇七	二五六・四〇三	一二五・〇七
宅地	一六〇・二五	三六六・六六五	五・〇七
切替畑	一八二・一五	二七・一五七	不詳
藪	五・二三	〇・五七七	不詳
芝地	六七・一二	一・〇一三	不詳
計	八四〇一・〇一	六、二八六・二九六	三一九・二九

ワ、境 今回の大震に、一番大きな影響を蒙つたのは境が横綱格である。食糧の缺乏を告げ、蕎麥粉、麥粉迄も食ふに至つたので、其の被害の程も推察するに難くない。

此の大震の爲め、相原忠平、相原才一、草柳勝治、草柳マサ、井上キミの五氏は、氣毒な震死者中に名をつらねた。更に此の外重傷者一名を出し、家屋の全潰せるもの五十三戸、半潰二十九戸といふ恐ろしい數字を示し、更に倉庫の全潰二、半潰十四、非住宅の全潰七十半潰六十五損害見積三萬二千九百二十九圓といふ、一村全滅に近い數を出したるは。深く境の方々に同情せざるを得ない。

此の爲めに、土地の被害に於ても、田、畑、山林、宅地を通じて、先づ村内唯一であらう。次に現はれた數字は、何によりも雄辯に一切を語つてゐるであらう。

地目	反別	地價	被害反別
田	五五六、二九	二、五八三、〇七三	八六、二〇
畑	六八六一、〇九	一〇、七九四、二九二	一七七二、一七
切替地	五〇、一七	九、七八〇	不詳
宅地	七三六、〇五	一、八一五、三三〇	二〇、〇七
山林	七三九九、一三	五九八、六三二	一三一、〇二
藪	五、二四	〇、五八〇	不詳
芝地	三〇、〇八	〇、七六〇	不詳
計	一五六四〇、一五	一五、八〇二、四四七	二〇〇九、一六

田に於て約一割六分、畑に於て約二割六分の損失といふ事は、可成永い間の苦しみを要する問題で、切に境の方々の自重を祈るものである。

カ、境別所 別所に於ては、井ノ口尋常小學校に通學の尋常六年の女生徒小清水徳子嬢が、崖の崩潰と共に落ち、道に埋没壓死せられたが、他に重傷者二名を生じ、境に劣らぬ被害を蒙つた。殊に宅地を崩潰されて、再び復舊の見込なく、他に新たな宅地を求めなければならぬ様な、不幸な人を出した。

別所に於ける全潰家屋は十七戸、半潰十八戸、倉庫の全潰三、半潰二、非住宅の全潰三十四、半潰三十八、軒別に倒れて、一萬六千一圓の推定損害を蒙つた。

土地の方面に就て見ても、田畑の損害極めて甚大であつた。次の表を熟讀せられ度い。

地目	反別	地價	被害反別
田	一八五、二七	七九八、九八八	五二、二〇
畑	三三九二、一五	六、一七〇、一七三	一四八、〇五
切替地	三〇、〇六	三、九〇八	不詳
宅地	二七四、一九	六八五、〇四三	一三、二〇
山林	三三五一、一九	二六三、二八八	一五七、〇六
藪	六四、〇九	六、四三〇	八、二四
芝地	二〇〇、〇〇	五、〇〇四	不詳
計	七四八九、〇五	七、九三二、八三四	三八〇、二五

ヨ、井ノ口 井ノ口は、字が大きいので、被害の數字も亦大きい。

井ノ口 震死者は、大原ウタ、宮用勇、岩本佐之吉氏の三名で、他に重傷者六名を生じた事は、其の恐ろしさを語つてゐやう。

井ノ口の全潰家屋は五十五戸、半潰九十二戸（是れには半潰百三十九戸説あるも、暫らく役場の調査に従て置く）で、是れを小字別にすれば次の様になつてゐる。

小字名	住家		倉庫		非住宅		見積損害高
	全潰	半潰	全潰	半潰	全潰	半潰	
下井ノ口	二	三〇	一	一〇	二	三九	四六二〇
北窪	三	一六	〇	六	〇	二一	二五三八
宮	一三	五	一	一二	二〇	七九	六六三〇
砂口	六	一五	二	二	二〇	一八	六三五八
遠藤原	二二	二	五	一	二八	一三	一一、三二四
五分一	九	二〇	一	五	八	二三	五、一七三
計	五五		一〇	三六	七八	一九三	三二七、六四三

今度は是れを土地の被害から見ると、家屋程の被害は起つてゐない。田の被害が四畝十五歩、山林が一畝十九歩、宅地が四反二歩に過ぎない事は、不思議に堪へないが、是れは數字を得る道が無いので、暫らく其儘にして置く。

以上を大觀して、總損害高を計上すると、十五萬九千五百七十九圓にして、大正十二年四月一日現

在戸數八百四十三戸の内、震災、水害に因る全潰戸數は百六十三戸、半潰は三百二十五戸、被害の輕微なものは三百五十五戸であつて、震災直後バラツクに居住を餘儀なくせられた數は五百七世帯、他家に同居した數一世帯で本村に於ける、被害が、この位であつたかは、大體想像が付く事と思ふ。

教育機關の被害

震災の教育機關に及ぼした影響は、甚大であり、廣大であつた。今、中村尋常高等小學校、井ノ口尋常小學校、境分教場に就て記述しやう。

イ、中村尋常高等小學校 由來校地は盛地であつた爲め、地盤も比較的に弱かつたので、大地震の來襲と共に、新校舎一棟、建坪百二十坪は、俄然崩壊し、舊校舎は大損傷を蒙つた。然し、教職員の努力に依て、火災を免れ、殊に 御眞影 御影は完全に郷社八幡神社内に奉安し得たるは、不幸中の幸といはねばならない。中村小學校實地調査による直接の被害高は、次の様な數字を示してゐる。

種 目	員 數	見積價格	備考
校 舎	一棟 一二〇坪	一二、〇〇〇、〇〇〇	倒 壊
机 腰 掛	一二五	六二五、〇〇〇	紛 失
裁 縫 机	二〇	一〇〇、〇〇〇	同 上

裁縫用道具	六八	三〇、〇〇	同	上
黑板	六	六〇、〇〇	同	上
教壇	四	一五、〇〇	同	上
柔道用疊	二一	一六八、〇〇	同	上
戸棚	一組	五〇、〇〇	同	上
裁縫標本	一〇〇	二〇、〇〇	同	上
器械	七	一〇〇、〇〇	同	上
其他ノ備品				
計	三五三	一三、一六八、〇〇		

又、舊校舎の半潰に依る損害は、階下百九十坪一合六勺、此の復舊費三千八百三圓二十錢、階上五十七坪一合七勺、此の復舊費一千四百三十三圓四十錢を要するの損害を生じた。又、此の震災の爲め、就學兒童中、自宅に於て尋常二年女生一名、同四年女生一名の死亡者を出した事は、遺憾の極と謂はねばならない。

依是觀之、被害高は相當に甚しかつたが、之を他に比較して見ると、先づ輕かつた方と思はねばなるまい。之れが爲め、學校では、九月四日、全村各部落に、臨時休校の揭示をして、十月一日迄、授業を休止した。が、教職員は、此の休業中も、各自分擔して各部落を巡視し、震災教育を行ひ、兒童の家庭を訪問し、通學道路の被害程度を調査すると共に、他面、校庭に生じたる大龜裂の修覆を兒童

と共に爲し、開校準備に最善の努力を拂つたので、十月一日よりは尋常科一、二、三、四學年は各二時間、尋常科五、六學年並に高等科は三時間宛の授業を行ひ得るに至つた。然し、殘存校舍は、修理全からざりし爲め、次の如き臨時分教場を作りて之を行つた。

部落名	分教場設置場所	擔當教職員
井ノ口	米倉寺	岩本訓導
境	境分教場	相原(規)訓導
比奈窪	青年會場	瀬戸訓導
松木	青年會場	門川訓導松本教員
鴨澤	大泉寺	北村訓導
古怒田	青年會場	早野訓導
大久保	青年會場	島村訓導
田牛	廣翁院	加藤訓導
藤澤	清岩寺	甲賀訓導河村教員
同	青年會場	中村訓導吉野訓導
遠藤	公會堂	相原(三)訓導

是等の分教場は、何れも學校と異り、設備不完全なものに加へて、兒童の精神的に不安全く收まらな

つた爲め、課程は復習を主とし、修身、讀方、算術、地理、歴史、理科、綴方を専らとした。而して第一期を終つた十月八日より、校舍に復歸し、八教室を使用して、児童を十學級に編成し、十八時間乃至三十時間の授業を講じ、復興への第一歩へと進んだ。

口、井口尋常小學校 井口尋常小學校に於ても、中村尋常高等小學校の被害に劣らぬ、大損害を蒙つた。激震と共に草苜の舊校舍は。右半潰滅し、左半は前の楠に支へられて、辛くも倒潰を免れて居たが、三日の雨に、あへなくも倒潰して了つた。新校舍は半潰の程度で、幸にも倒潰は免れ得た。此の舊校舍は、間口十八間、奥行五間、即ち建坪九十坪を算し、此の内には、唱歌室、裁縫室、職員室、並に普通教室二教場を包含して居つた。此の他、建坪十二坪の、使丁室宿直室も全潰し、總損害額は五千五百圓を推定せられて居る。此の内、機械、器具、標本、其他の損害見積額五百圓、校舍の損害見積額五千圓といふ事である。

そこで、會議の結果、九月中を休業する事に決し、其の間、銳意復舊に努力する事になつた。即ち九月二十五日に至つて、新校舍の引起し工事を開始し、村中より夫役出動し、是れに仕事師、大工等の参加し、更に取片付けには、尋五、六の生徒の應援を得て、二十六日、工事完成を告げ、十月一日より、授業は、二部教授制を布いて、開始した。

此の震災に伴つて起つた、當校生徒の被害は、負傷者に尋六女一名（星野マス）死亡者に、尋六女

生小清水徳子一名を出した事は、悲痛の極であつた。又、震後、東京よりの避難家族中より、三名の新入校生を見た。

ハ、境分教場 境分教場は、震災に就ては、比較的損害の程度が輕微であつて、校舎が半潰したに止つた。併し是れが爲め、復舊には半潰建坪數七十九坪七合五勺に對し、一千百九十六圓二十五錢を要するに至つた。分教場も本校と同じく、九月中は休校したが、十月一日よりは應急修理の結果、震災前と同一の授業を行ふ事が出来た爲め、兒童の學業には、さまで大きな損害は及ばさなかつた事は、幸と謂はねばならない。

ニ、實業補習學校 小學校卒業生にして、職業に従事中の者に對し、農業に關する智識技能を授けると同時に、國民生活に必須な教育を施す目的を以て生れた中村補習學校も、例年十月一日に開校すべきを、震災後は小學校々舎の破壊と、震災に蒙つた復舊事業の多々あつた爲め、十月十一日休校し、十二月一日より授業開始の運びとなつた。

公營物の被害

村の財産の一部であり、村民に密接の關係を持つて居る村公營物には、どんな被害を與へたかといふと、第一に教育機關である中村尋常高等小學校、井ノ口尋常小學校、境分教場等は、何れも被害數

甚であり、損害高も第一位にあつたが、是の詳細は、別項『教育機關の被害』中に述べてあるから、今は、是れを除いたものに就て申上げませう。

イ、役場　村の行政機關である役場は、第二震と共に土藏を全潰せられて、事務所は半潰の憂目を見た。是れが爲めに、修覆の完成する迄、行政事務は、信用組合事務所を借り受けて執つて居つた。が何時迄も放置は出来ないで、應急費五百五十圓を支出して修繕した。土藏は半潰せられたけれども、凡ての重要書類は完全に搬出し得て、事務上何等の支障は無かつた事は、幸福といはねばならぬ。

ロ、隔離病院　比奈窪にある隔離病院は、平生人が入つて居ない爲め、豫想外に傷んで居つたと見へて、地盤が南方田の中に崩潰流出した時、七棟は全潰し、五棟は半潰して了つた。そこで、時候は初秋に向ひ、殊に飲料水、食物、住居等が、以前と一變し、止む無く不衛生状態に陥る關係上、傳染病患者の發生を見た時には、其の傳波は恐るべきものがあらうとは、何人にも考へられる處で、急に應ずる爲め應急費三千七百九十八圓を支出して、當座の使用に差支の無い様に修覆した。

ハ、橋梁　本村には大川は少いが、道路と川流の關係上木橋の數は非常に多く、是の破壊は、馬車、荷車等の交通を杜絶し、運輸上至大の影響を及ぼすもので、及んでは物價に迄も其の響が傳る關係上、縣道は縣廳に、郡道は郡役所に應急復活方を交渉すると共に、村道にある橋梁は、二十四ヶ所

是の延間數七十間が落ちたので、一千五百五十圓を投じて應急修理を加へた。

ニ、道路 村道に就て見るに、二百三十二ヶ所、是の延間數六千七百七十間は、龜裂、崩潰して、交通を妨げた。村では是の應急修理の爲めに三千八十五圓の巨費を投じた。

ホ、用水路 用水路の破壊せられたものは十八ヶ所七百二十間に及んで居た。是れには三千五百十圓の應急費の支出を要した。

ヘ、堤防 初秋より仲秋へかけての水害を恐れ、破壊せられた十ヶ所三百間の堤防に對して、三千圓を投じて、急を凌いだが、勿論完全といふ譯には行かないので、何れも村の財政の回復に従ひ、村債とか、低利資金とかに依つて、完全を期する外は方法が無かつた。

以上の數字から觀ると、震災の爲めに、公營物に對して支出した金額は、一萬五千四百九十三圓に及んで、村としては、非常な痛手であつた。

震災と産業

中井村の産業は『農』の一字で盡す事が出来る。『農』の元は『土』である。大地動いて『土』を崩し、壞したる爲めに、其の影響も一番目立つた。

イ、農作物栽培と施肥關係

這般の異變が農家の冬作、特に麥作の播種期に際して起り、各種の交通、運輸機關を破壊した爲めと、金融の杜絶の爲め、一時物資の輸送が絶たれ、購買資力を失つて、農家の最も必要とする肥料の缺乏を來すに至つた。過燐酸石灰、完全肥料、大豆粕等の全肥は、全く缺乏を告げ、村農會も種々活動したが、需要に充つ可き荷廻りの無い状態で、遂に縣農會に交渉して、一時借入で漸く間に合はせ得た事は不幸中の幸とすべきであるが、大豆粕其他は運賃の關係上一枚に付き三四十錢の高値を唱へて居た。

ロ、震災と副収入の關係

一、養蠶 春蠶に比して秋蠶は數に於て少かつたが、蠶兒の斃死に依る直接損害と、晚秋蠶の上簇近きもの等は、災害に加ふるに流言蜚語に脅かされて、警戒に力を入れた爲め、飼育上の手不足を來し少なからぬ損害を受けた。即ち大正十一年度に於ては、掃立枚數二百五十八枚に對し六百六十六貫の收繭あり、是の賣上五千七百七十四圓に達した。ところが、大正十二年に於ては、掃立枚數二百八十三枚に上り、枚數に於て二十五枚の増加を見たにも係らず、收繭量は二百五十八貫に過ぎず、前年度に比較して四百八貫の減少であり、収入金額も一千二百六十五圓で、四千五百九圓の減少を見た。

二、其他の副業 井ノ口方面は従來牧畜の盛な處であつて、百五十五頭の牛を有し百四十頭の豚を飼育して居るが、震災後搾乳の販路絶へ、至大の損害を蒙つた。其他の家内内職等も相當損害を受けた様であるが、正確な統計は得られないので、平年に於ける収入のみを擧げて置から。

木	製	品				
製造戸數	家具類	桶類	計			
三	三〇〇	四二〇	七二〇			
藁	製	品				
製造戸數	俵	繩	草鞋	草履	筵	計
六七〇	八七五	一二〇	九〇	六六〇	六〇〇	二、三四五
竹	製	品				
製造戸數	籠類	其他				計
二	九〇〇	—				九〇〇

ハ、物價と農産物の價格

一、一般物價 震災の爲め、物資の需要供給に多大の支障を來し、従て一般物價に及ぼした影響

は頗る廣汎であつた。殊に日用品、生活必需品にあつては、物により五、六割の騰貴を見た。就中、平時にあつては、需要の少い蠟燭、石油の如きものが、電燈の消滅と共に、俄然需要を起して、忽ち八倍から十倍に奔騰し、煙草の如き官營品でさへも、品薄を口實に三四割中には二倍位の價格で賣つた店もあつた。此の他バラツク用のトタン板、釘類等も二、三倍に騰貴した事は、今尙、何人の頭にも新しい記憶であるに異ひない。

其後生活品に對する暴利取締令の公布を見、小賣標準價格の設定を見て、日を経るに従て漸次舊に復するに至つた。

二、農産物價の變 震災後米穀其他の農産物が沸抵した結果、一時正に其の價格に大變動を來さうとした。然し是れは、村會の努力と各貯藏家との徳義心の結果、幸に一定價格を保ち、米は十三圓五十錢、小麥六圓、大麥四圓五十錢に止つたが、其後品薄に伴れ五、七十錢方の昂騰を現はした。

一、耕地及作物の被害

中井村に於ける耕地は、畑は七百五町六反四畝七步で、田は九十七町一反二畝十一步、計八百二町七反九畝十五步中、被害を蒙つた田は四町二反五畝、畑は二十五町八畝、計二十九町三反三畝が、崩潰、龜裂、埋没等の危に會ふと同時に、用水路、堤防の破壊に伴ふ損害も相當に大きかつた。

耕地の被害は、直に作は作物の被害を惹起し、田面の龜裂其他は、水田の枯死を惹起するは當然であつて、其の爲に蒙つた損害を、統計的に列擧すれば次の様な數字となつて現はれて居る。

種類	年度別		
	大正十一年	大正十二年	大正十三年
春蠶	掃立又ハ 作付反別 五貫	掃立又ハ 作付反別 四〇〇	掃立又ハ 作付反別 三六二
大麥	收穫量目 三、二七七石	收穫量目 二、六四三石	收穫量目 二、六四四石
小麥	價格 三、九二四圓	價格 二、九〇一圓	價格 二、八〇三圓
陸稻	收穫量目 五、九八石	收穫量目 三、五五〇石	收穫量目 六、七九五石
水生稻	價格 八四、七六四圓	價格 三、五五〇圓	價格 七五、一五七圓
落花生	收穫量目 九四、六石	收穫量目 三、五二〇石	收穫量目 四、五二〇石
大豆	價格 八二、三四圓	價格 六、七六〇圓	價格 六五、一三六圓
菜種	收穫量目 二、四三七百斤	收穫量目 二、〇八六百斤	收穫量目 一、〇二四百斤
	價格 二、一〇五圓	價格 二、七〇九圓	價格 六、五、一三六圓
	收穫量目 一、〇〇百斤	收穫量目 一、〇八〇百斤	收穫量目 一、三三〇百斤
	價格 九四、二四〇圓	價格 八、六〇〇圓	價格 一、三三〇圓
	收穫量目 一、〇〇百斤	收穫量目 九、六〇百斤	收穫量目 一、四一〇百斤
	價格 一、〇〇圓	價格 一、八四三圓	價格 七、八四七圓
	收穫量目 五、〇〇百斤	收穫量目 四、五七三百斤	收穫量目 四、二八百斤
	價格 五、四〇圓	價格 六、七三三圓	價格 七、八四七圓

三、葉煙草の影響 葉煙草は中郡と共に所謂秦野葉煙草の産地として、本村の主要生産品であつて、其の年々に得る收穫は約三十萬圓に及び、一切の他の農産物を以てしても、唯一つの煙草の生産額には及ばない。

震災當時は、葉煙草の取入れは大體終つて居つたが、乾燥其他の仕上げ時期に際會して居つたので、家の崩潰、半等潰の爲に、立腐させたり、失はれたり、又、手入の不十分な爲めに品位を下げたりして、村經濟に大波紋を畫いたのであつた。

何人にも一目して其の被害が判然する様に、專賣局發表の統計を掲げて見やう。

	大正八年	大正九年	大正十年	大正十一年	大正十二年
耕作人員	六〇三	六〇〇	六〇三	五九八	五九九
耕作反別	一六、二七、一五	一六、五九、三六	一五、九五、二〇	一五、三〇、三三	一四、九八、一六
收穫量目	九三、四三、五五〇	八三、六八、九〇〇	七三、五三、〇九〇	八五、七一、九五〇	八九、三四、一〇〇
賠償金	三四六、七五、二二五	三二〇、九七、四、三六	三〇六、六〇、九、三四	三三六、七三、四、七五	三六三、三三、三、三四
反當り收穫量目	五六、八〇〇	五〇、五〇〇	四六、七〇〇	五六、〇〇〇	四六、三〇〇
反當りの賠償金	二二三、八八	一九一、一八	二〇一、七四	二二〇、〇九	一七五、七七

依之觀是、前年度に比して反當り平均に於て十貫目の差を生じ、賠償金亦四十四圓二十七錢九厘の大差を生んだ。又、一貫目當り賠償金も、大正十年度は四圓十四錢、大正十一年度は三圓九十二錢八厘の平均額を見たのに、大正十二年度に於ては三圓七十九錢八厘といふ様に低下した。是等の數字は、其の被害の奈邊にあつたかを、最も有力に物語つて居るものである。